

神経文字学 ― 読み書きの神経科学

岩田 誠, 河村 満 ● 編集

北海道医療大学心理科学部教授 田代邦雄

神経文字学 (neurogrammatology) とはなにか？

その斬新な用語にまず驚かされる。有名書店で本書が目立つ場所に積み上げられているのをいち早く見つけ直ちに手に取ってみたが、その書評のご依頼を受け感激である。また、この用語は、編者の岩田 誠先生の造語であることも知り、まさに言語の神経科学者による素晴らしい発想と言えるであろう。

2006 年の第 47 回日本神経学会総会 (岩田 誠会長) シンポジウムで、今回の編者である岩田 誠・河村 満 両先生が司会をされた「神経文字学」を聴衆の 1 人として拝聴した者として、その際のシンポジストのほかに新たな著者も加え 1 冊の本にされたことに対し、両先生ならびに関係各位に敬意を表する次第である。

本書を開くと、通常の「はじめに」、
「おわりに」にあたる部分が、「本書
発刊によせて―神経文字学への想
い」、「あとがきにかえて」となり、
しかも両先生の対談による本書への
想いが熱く語られていることもユニ
ークである。

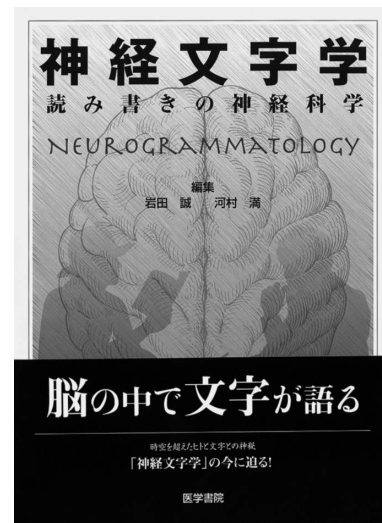
現在の日本人は形態素文字である漢字、表音文字と呼ばれる仮名文字を持ち、通常、縦書きでは「書く方向；上→下、改行；右→左」、それが、横書きでは「書く方向；左→右、改行；上→下」となる。額入りの漢字文字で経験するが、右→左方向への書字をみるのがあっても漢字では読むことに問題はない。しかし、欧

米のアルファベット文字、特に筆記体では上→下へ書くことはなく、また右→左方向への筆記体はアラビア語やヘブライ語の子音アルファベット以外では“鏡像書字”でみられるだけであり、また鏡に写した場合は漢字では理解できるが、アルファベット文字、特に筆記体で読むことは不可能である。これら書字の方向についても「文字学こぼれ話・書字の方向(1)」に紹介されており、さらなる興味をそそることになる。

第 1 章「漢字仮名問題の歴史的展開」に始まり、第 12 章「日本語書字の機能画像解析」に至るまで文字学に関する種々の話題を、編者以外に 15 名の執筆者が加わり、最先端の知見を踏まえて論旨を展開する。また合間合間に「文字学こぼれ話」として、リラックスしながら文字学の面白さをアピールする構成である。

日本語の欧米の文字にない特徴を生かした研究は、それだけでも新知見を提唱できるだけではなく、脳機能画像などの最先端の解析装置を駆使することで欧米語では計ることのできない発見も期待されるであろう。

また編者である両先生は、神経学、神経症候学、高次脳機能障害学に特にご造詣が深く、その分野の日本のパイオニアにあたる恩師であられる豊倉康夫先生、平山恵造先生にそれぞれ師事された方々という見事なペアを組まれていること、さらに各章の担当者として、その項目の日本の第一人者を揃えられ、神経文字



学のコンセプトを生かした記述が展開されている。その各章の内容に触れることは省略せざるを得ないが、すべて力作であり、参考文献を参照しながらさらに学ぶことができる配慮がなされている。

各章を通読するもよし、むしろ章間を行き来しながら学ぶもよし、また各章ごとに用意された軽妙な「文字学こぼれ話」で頭を冷やすもよしと、神経文字学の世界に引き込まれていく魔法にかけられていく感がある。

本書こそ、難解ともいえる「神経文字学」を、神経学・脳科学関連の諸先生ばかりでなく、医学生、一般の読者をも引き込む魅力を無限に秘めた素晴らしい著書として心から推薦するとともに、両先生の今後ますますのご指導、ご発展を期待し書評の任を務めさせていただくこととする。

A 5 判, 248 頁

定価 3,360 円

(本体 3,200 円 + 税 5 %)

[ISBN 978-4-260-00493-0]

医学書院刊